

連載

湖面の光 湖水の命

琵琶湖諸元

集水域 3,174km²

面積 670.25km²

周り 235.20km

水量 275 億 m³

最深部 103.58m

平均深さ 41.20m

＜物語＞世紀の水の大事業 ～琵琶湖総合開発[†]～

高崎 哲郎 (作家)

第5話 「高度経済成長と琵琶湖開発構想」



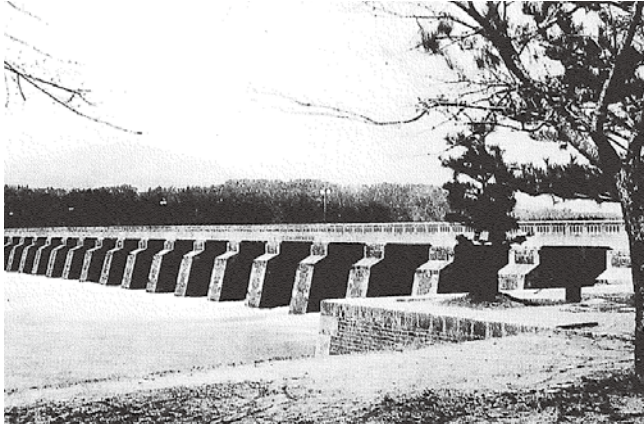
浮御堂 (滋賀県大津市)

敗戦からの「独立」から1年経った昭和28年(1953)は最悪の水害の年となり、被害が西日本に集中した。6月末、九州地方に停滞した梅雨前線は西日本各地に豪雨を降らせた。松原・下笠ダムしもがけの建設につながる九州では未曾有の大洪水だった。次いで、7月中旬には紀伊半島の山岳地帯を梅雨の豪雨が襲い、紀の川、有田川などの流域では壊滅的被害を受けた。

吉田内閣は、7月末内閣に副総理を長とする治山治水対策協議会を設置した。国会でも衆参両院に水害地緊急対策特別委員会が置かれ、国をあげて恒久的な洪水対策に乗り出すことになった。「運命の悪夢」

はこれでもおさまらなかった。9月下旬、大型台風13号が近畿・東海地方を直撃した。死者行方不明者は478人に上った。日本は「水害列島」となった。琵琶湖・淀川水系でも13号により大洪水に見舞われ、宇治川の堤防が決壊して旧巨椋池干拓田おぐらなど2880ヘクタールが25日間水没した。桂川下流でも支川が相次いで破堤して流域の田畑や住宅地が浸水した。台風通過後には各河川とも次第に水位が下がり、水害が拡大する恐れは薄らいだ。だが琵琶湖だけは例外だった。琵琶湖の水の出口にあたる瀬田川洗堰あらいげきは、洪水に備えてあらかじめ琵琶湖の水位を下げておくため、開放の指令が25日朝出されていた。今日の電動式の新洗堰とは異なり、当時は角落とし方式で人力によって操作をしなければならなかった。角材を1本ずつウインチで巻き上げる旧来の作業ははかどらず効果があらわれないうちに、淀川下流は増水した。夕刻には警戒水位を突破したため、再び全閉しなければならなくなった。堰を閉鎖する作業も開放同様に時間を要する。流れが速いため角落としを入れただけでは浮き上がって閉鎖の効果があがらない。上からモンキースパナで叩いて締めなければならず、そのために下流で最大流量を記録した25日夜半にも毎秒300立方メートル以上の激流が洗堰から流下した。

[†] 国と上下流の府県など関係機関が25年をかけて①琵琶湖の水質と自然環境の保全を図り②洪水・渇水被害の軽減③水資源開発④琵琶湖流域の地域開発を実現した約1兆9,000億円の大プロジェクト



旧瀬田川洗堰（南郷洗堰、水資源開発公園（当時）刊『恵みの湖』より）

洗堰は下流の水位低下に伴って、26日未明から再び開放を始めた。しかし宇治川の堤防決壊箇所を考慮して、開放度を加減した。このため琵琶湖の水位は上昇を続け、27日午後4時には、鳥居川水位1.02メートル、彦根水位1.19メートルとなり、湖岸の田畑4500ヘクタールが水没した。当時の洗堰の疎通力は最大でも毎秒約600立方メートルであったため、水位低下の速度は遅く、鳥居川水位が再び通常の0.30メートル以下に下がるまでには26日間もかかった。この間、洗堰の操作をめぐって、上流の滋賀県と下流の京都府・大阪府それに建設省近畿地方建設局（当時）の間で激しい折衝や陳情合戦が繰り返された。

政府の淀川治水計画は抜本的な改訂が行われることになった。「淀川改修基本計画」の正式決定で、宇治川筋に天ヶ瀬ダムが建設されることになった。同時に琵琶湖総合開発をめぐる論争に拍車をかけることになった。

（参考文献：『瀬田川砂防のあゆみ』、『淡海よ 永遠に』、『淀川百年史』、国交省・（独）水資源機構・滋賀県の関連文献、筑波大学付属図書館所蔵資料）



戦後の社会的・経済的情勢から多目的ダムの必要性和優位性が認識されるようになった。法律的には国土総合開発法（昭和25年）、特定多目的ダム法（昭和32年）の制定により、大型ダム方式（日本型TVA）による治水・利水計画に転換されるようになった。天ヶ瀬ダムもこの法律の適用を受けて建設された。水源地・琵琶湖の利水をめぐる議論も電源開発を主眼とする政策から都市用水の確保を目的とした政策に転換されることになった。こうした社会背景を受

けて、天ヶ瀬ダムは洪水調節・発電それに用水供給を目的とした淀川水系の多目的ダム第1号として施工されることになった。同ダムは昭和22年に現地調査し上下流問題や発電所建設など紆余曲折を経て、35年から本格的工事に入り、39年11月26日に完成した。〈天ヶ瀬ダムはドーム型アーチ式コンクリートダムの曲線美を誇る。堤高：73メートル、堤頂長：254メートル、湛水面積：1.88平方キロメートル、総貯水量：2628万立方メートル、水没面積：63ヘクタール、水没家屋：138戸、天ヶ瀬発電所の最大出力：9万2000キロワット。ダム総事業費：66億6000万円〉

昭和30年代は戦後復興から高度経済成長へと飛躍した時代であった。首都圏はもとより阪神地域においても、都市人口の集中化や産業の伸展により都市用水（水道水や工業用水など）の需要は急激に増加した。淀川河口地帯では地下水の大量くみ上げにより地盤沈下が進んだ。電源開発を目指した多様な計画案が立ち消えになった後も、日本最大の淡水湖・琵琶湖の水資源に対する重要性が増大することは、下流にあたる京阪神地域の行政当局の周知とするところであった。淀川の水資源開発は急務であり上流の水源地琵琶湖に関心が集中した。

「淀川改修基本計画」と相前後して総合的開発への動きが起こった。昭和31年（1956）4月11日、琵琶湖総合開発協議会が発足した。同協議会は、建設省近畿地方建設局の呼び掛けに、滋賀・京都・大阪・兵庫の各府県、京都・大阪両市、阪神上水道組合、関西電力が応じて発足したのである。同協議会は32年5月27日琵琶湖の現地視察を行い、33年5月21日の第3回会合で、需要水量の推定と琵琶湖の利用計画案を討議し、需要水量調査のための分科会を設置するなど基礎的な活動を開始した。計画案の柱は①都市用水需要の再検討、②山城盆地の用水（琵琶湖疏水や宇治川の取水）の淀川還元を期待する方向の検討、③水計算の精度と安全度を上げること、であった。③については、①と②を基本計画量として、利水計画の安全度を淀川河水統制計画に合わせて水計算を行った結果、琵琶湖の利用水深はマイナス3メートル必要とすることが判明した。「水需要調査を通じて水行政に携わる行政機関の横の連絡が密になったことは、協議会の一つのメリットである」（『淡海よ 永遠に』）。



昭和35年（1960）12月、自民党水資源特別委員会は

第5話「高度経済成長と琵琶湖開発構想」

水資源開発促進法案と水資源開発公団法案大綱を公表した。同委員会は会合を重ねた上で促進法のもとに2つの公団（水資源開発公団と用水事業公団）を設置する案を立てて、政府に法制化の要請を行った。これを受けて建設省は水資源開発公団法、利水3省（農林・通産・厚生）は利水事業公団法案を提出した。政府はこの両法案に基づいて関係省庁の調整をはかり、36年4月、首相池田勇人の指示で水資源関係閣僚会議が開かれ公団の一本化が決定された。同年5月、水資源開発促進法案と水資源開発公団法案が国会に提案され、同国会では審議未了となったものの、同年9月の第39国会に両法案が再提案されて10月13日一部修正の上可決された。翌37年水資源開発公団（水資源機構前身）が設立され、琵琶湖開発事業を担うことになる。両法案の成立に際し、滋賀県企画課は異例の声明を発表した。

「（前略）申すまでもなく、本2法案は利根川の開発とならんで淀川水系、すなわち琵琶湖の水資源開発を対象にしておりますから、法案の内容も琵琶湖の特殊性に合致するよう、又沿岸住民に及ぼす諸影響に対しても完全な措置がとられ、然も水資源開発を通じて滋賀県将来の開発発展が期待される諸施策を同時に実施することができるように修正する必要がありました。結果的にみれば未だしの感もありますが、これらは今後機に臨み善処することとする一方、前国会審議の過程における質疑応答、或いは付帯決議事項をよく参酌し、2法の運用があやまって実施されないよう十分留意すると共に2法の具体化に対しても万全の対策をとることにより、その目的を達成しなければならないと考えます」（原文のママ）

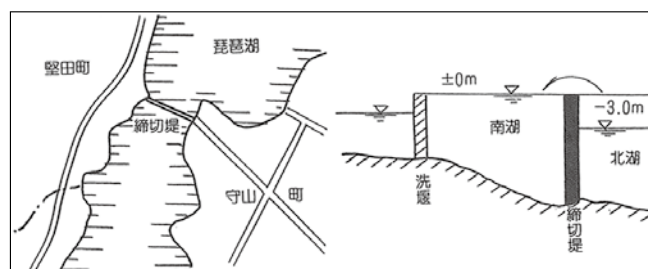
水資源開発促進法は、河川の各水系において水資源の総合的な開発・利用の合理化促進を目指したものであった。この法律により、内閣総理大臣は、広域的な用水対策を緊急に実施する必要があると認める河川の水系を水資源開発水系として指定することができるようになった。これにより現在までに、利根川水系、淀川水系（以上昭和37年（1962）4月）、筑後川水系（同39年10月）、木曾川水系（同40年6月）、吉野川水系（同41年11月）、荒川水系（同49年12月）、豊川水系（平成2年（1990）2月）の7水系が指定されている。

水資源開発水系を指定した際、内閣総理大臣は、当該水系の水資源開発基本計画（所謂「フルプラン」）を決定しなければならない。基本計画によって明らかにされるのは、①水の用途別の需要の見通し及び供給の目標、②供給の目標を達成するために必要な施設の建設に関する基本的な事項、③その他水資源の総合的な開発及び利用の合理化、に関する重要事項である。世紀の祭典東京オリンピックは昭和39年秋に開催されることが決まっていたが、マンモス都市東京は水不足にあえいで「東京砂漠」と報じられる事態にまで陥った。開催を危ぶむ声すら出ていたのである。

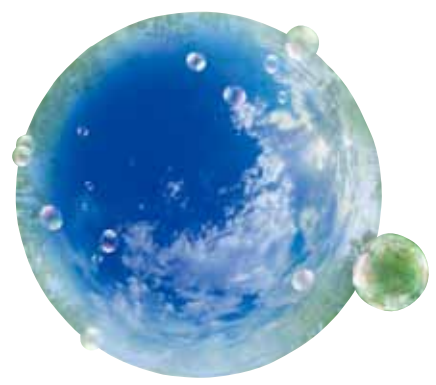
◇

琵琶湖総合開発を目指す構想が、昭和30年代後半から相次いで示された。

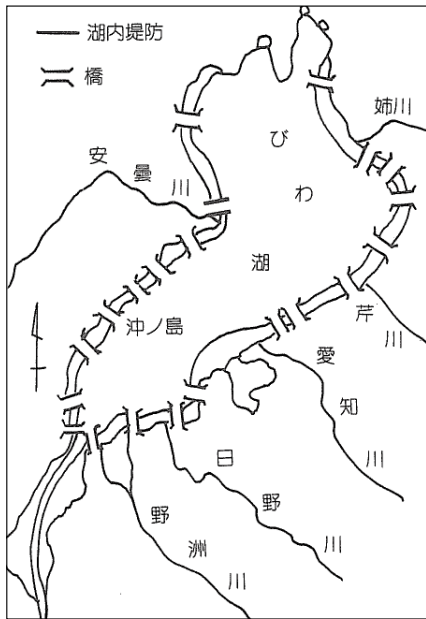
「南北締切堤案」は、昭和35年9月に琵琶湖総合開発協議会で発表されたことから「協議会案」とも呼ばれ、締切堤の構想位置から「堅田締切堤案」とも呼ばれた。この案は、琵琶湖の東西間の岸の距離が最短となる堅田・守山間に締切堤を設けて、北の部分（北湖）をマイナス3メートルの水位まで利用するという大規模な構想である。これによって下流である阪神地域の昭和50年（1975）の水需要を充足させ、同時に洪水期の水位を通常マイナス0.3メートル以下に抑えて湖岸の治水にも役立てようという計画であった。「前例をみない規模」（『淡海よ 永遠に』）であった。この案に対して、滋賀県をはじめ地元自治体は反対を表明した。琵琶湖を二分することは滋賀県も二分することにつながるからであった。滋賀県は、瀬田川洗堰の操作をめぐる国と県との対立同様に、琵琶湖の南北湖締切りによって生じる南北湖周辺の県民対立を心配したのである。また反対の背景には、下流の水供給を優先し、水コストを安くするという発想から締切案が生れた点にもあった。滋賀県が期待する開発の具体案も示されていなかった。



南北締切堤案（『淡海よ 永遠に』より）



「ドーナツ案」は、37年6月に農林省京都地方事務局（38年5月近畿農政局と改称）が農業用水供給の立場から構想したものである。湖岸から200メートルから500メートル離れた湖中に湖岸と並行に堤防を構築する案で、環状に琵琶湖を内湖と外湖に分割して利用することから「ドーナツ案」と呼ばれた。この案は湖岸の水位低下に対する補償対策に悩む建設省への対抗策として構想されたものであった。だが当時の積算で700億円という膨大な工事費を要し、各種の地元補償とそれに関連した開発による地元還元の度合が低かったため、滋賀県は強い関心を示さなかった。



ドーナツ案（『淡海よ 永遠に』より）

「パイプ送水案」は、38年に滋賀県独自の案として構想された。送水専用のパイプを敷設して琵琶湖から阪神地方に毎秒20立方メートル、年間6億立方メートルのきれいな水を供給しようとするものであった。この案は、南北締切堤案に対する滋賀県の考えを明瞭に示したもので、下流利水者の関心と呼んだ。しかし建設省近畿地方建設局では、この案による湖水低下は現水利権に毎秒20立方メートルをプラスする場合は約1.4メートルとなり、①南湖の被害が大きいこと、②現水利権内の場合は淀川の維持用水の減少により取水能力の低下と水質汚濁の悪影響があること、③河川敷のパイプ敷設は河床変動などに好ましくないこと、④水質浄化対策の送水路建設は二重投資となること、などの理由により批判的態度をとったことから、実現には至らなかった。

「湖中堤案」は、40年に建設省が「琵琶湖総合開発の構想」として滋賀県に提案したものである。先の「南北締切堤案」の批判を考慮して作成されており、

堅田・守山間に低い堰を設けるが、①北湖をマイナス3メートルまで利用するほか南湖をマイナス1.4メートルまで利用する、②湖周道路と河口処理（改修工事）を付帯工事とした、③湖岸にクリークを造り、ここに湖水をくみ上げて周辺の水路の水位と地下水位を維持させるようにする、となっている。この案も基本的には南北湖締切堤が前提であり、北湖マイナス3メートルとの規模も変更されなかったことから滋賀県の合意は得られなかった。

<付録>我が歴史・文学そぞろ歩き～琵琶湖編～

『特選米朝落語全集』（東芝EMI、全40巻）の中から近江国や琵琶湖を舞台にした噺をとり上げてみる。「人間国宝」桂米朝師が上方落語界の重鎮であり古典落語の最高峰であることは言うまでもない。修養と教養に裏打ちされた研ぎ澄まされた話芸は知的で上品な笑いを誘うのである。近江国や琵琶湖をテーマにした噺を思いつくまま取り上げてみると、『矢橋船』、『近江八景』、『亀佐』、『仔猫』、『狸の化寺』（近江国とは断定しにくい）が……。

私は『矢橋船』を愛する。時代は江戸末期か明治初頭であろう。「八橋の帰帆」（近江八景）で知られる矢橋港から乗合い船が出るところから幕が開く。船には武士、商人、農民、病人などが乗り合わせるが、乗合い人の洒落や「色問答」がまことにおかしい。活字で師匠の話芸を再現するのは至難の技だが、一部引用してみよう。（イ、ロは船中人物）。

イ「こっちはあんた、江州で有名な山どっせ、あら。あらあんた三上山。一名百足山とも言いますな」
 ロ「百足山。けったいな名前が付いてまんのやな」
 イ「昔、俵藤太秀郷という豪傑が、あの山で百足を退治したんで」
 ロ「百足ぐらい私かてつぶせませ」
 イ「そんな百足と違う。俵藤太が退治した百足というのはあの山を7巻半巻いてたちゅうのや」
 ロ「7巻半。おっそろしい大きな百足だんな」
 イ「さあ、ちょっと聞くと大きいようだけれども、「ななまきはん」は「はちまき」よりちょっと短いや」
 船中のやり取りはユーモアの極であり春風駑蕩とした風情をかもしだす。湖畔の四方の景色を楽しみながらゆっくり船に揺られているような自足した気分になるのである。（つづく）。